

狸の恩返し

南部町

絵：野口宣友



むかしむかし、法勝寺川の川沿いに東光寺（現在の境）という村がありました。ある日の真夜中、村に住む惣兵衛さんが眠っているところ、「ゴト、ゴト、ゴトン！」と、台所から鍋のふたが落ちる音が聞こえてきました。「何事だろう？」と、目を覚ました惣兵衛さんが、そのと台所をのぞいてみると、痩せた2匹の親狸が、6匹の子どもに鍋の中に残っていたご飯を食べさせていました。親狸は共にひどく痩せていましたが、自分達のご飯を食べようとせず、すぐに逃げ出せるように子狸の側で見張りをしています。惣兵衛さんは「親というのはえらいもんだなあ・・・」とたいそうあわれに思って、知らぬ振りで狸たちに飯を食べさせてやり、そのまま寝床に戻りました。

狸たちは山に食べ物がなくなつて困っているに違いないと考えた惣兵衛さんは、次の晩から、たつぷりと食べ物を作らせて台所に置いておくようにしました。用意された食べ物、翌朝になるといつもきれいに食べられていました。ところがある晩、家の中から妙

な音がして、惣兵衛さん一家が目覚めると、いきなり2人の泥棒が惣兵衛さんの鼻先に刃をグツとつきつけて「やい、金を出せ！出さねえと、てめえたちの命はないと思え！」と脅してきます。惣兵衛さんは恐ろしくてどうすることもできず、ブルブルと震えることしかできません。仕方なく、泥棒たちのいわれるままに、お金を取り出して泥棒に渡した、ちょうどその時、開けっ放しになっていた表戸から、狸たちがひよいと顔をのぞかせました。いつもとは違った様子に、お父さん狸がこちらを見たかと思うと、狸たちは外へと戻って行ってしまいました。すると突然、惣兵衛さんの家の前から、たくましく野太い声で「はあつ、ごすいこい！」と聞こえてきて、大きなお相撲さんが8人、ドヤドヤと家に入ってきました。お相撲さんは雷のような大声で「惣兵衛さん！こんばんは」と挨拶すると、泥棒たちに向かって「お、おい、こら！お前、惣兵衛さんに何を言ってるんじゃない！」とサッサと出て行かんか！」「お金はお返しして

おけよ！」「早う出ていかんと、首の骨をへし折るぞ！」と怒鳴りつけました。これに驚いた2人の泥棒は、慌てて奥に逃げ込むと、雨戸や障子を蹴破って、転がるようにして逃げて行きました。惣兵衛さん達がお相撲さん達にお礼を言おうと振り返ると、8人のお相撲さんは1人もいなくなっています。「はて、どうしたのか？」と惣兵衛さん一家は不思議に思って家の周りを探しましたが、お相撲さん達は見つからず、その夜は眠ることにしました。

すると、眠った惣兵衛さんの夢に狸たちが出てきてこう言います。「いつも大変ごちそうをいただいています。おかげさまで子ども達が元気になりました。そのお礼という訳ではありませんが、ちよつとお助けの真似事をしたわけです」

そんな訳で、惣兵衛さん一家は「親子の愛情」と「やさしい心」を覚えてくれた狸たちを「一家の命の親」として、ますます丁寧にもてなすようになったということです。おしまい